

氏 名	A G A R U
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第614号
学位授与年月日	令和5年 3月17日
審 査 委 員	主査 教授 金崎 啓造
	副査 教授 馬庭 壯吉
	副査 准教授 田村 太郎

論文審査の結果の要旨

脆弱性骨折は、交通事故や高所からの転落などの外傷性骨折を除外した、通常では骨折しない軽微な外力による骨折として定義され、高齢者において多発し、転倒頻度増加と関連する。脆弱性骨折・転倒の発生は、薬剤や生活習慣、併存疾患と関連するとも考えられ、事実、睡眠導入薬、ステロイドの使用や喫煙、慢性関節リウマチ(RA)、糖尿病による脆弱性骨折リスクの増加が知られている。高齢者では複数疾患の罹患や多薬剤投与が高頻度に認められるため、多疾患重積が脆弱性骨折リスクとなるかを明らかにすることを目的として、島根県内の住民健診コホートデータを利用し、60才以上の1420人を対象とした後ろ向き研究を実施した。脆弱性骨折の頻度に関して、過去5年間では女性(15.3%)が男性(4.9%)の約3倍であり、男性ではRA、両親の大腿骨近位部骨折既往と関連し、女性ではRAおよび降圧薬使用と正の相関、脂質異常症や高脂血症治療薬の使用とは負の相関を認めた。年齢調整 Charlson Comorbidity (ACC) Index による多疾患重積の影響を分析したところ、ACC Index (1-3)群に比較してACC Index (>6)群では、脆弱性骨折リスクの有意な上昇が認められた。多重ロジスティック回帰分析から、ACC Index は、女性、過去1年間の転倒、両親の大腿骨近位部骨折の既往と独立して脆弱性骨折リスク上昇と有意に関連していた。以上から、高齢者における多疾患重積は脆弱性骨折リスクに寄与し、ACC Index がそのリスク評価に有用である可能性が示された。